野川　生命あふれる川に

河原版（かわらばん）

野川で遊ぶまちづくりの会
代表　尾辻　03-3326-8285
編集　四方田　0424-80-4640
第六号　1993年6月1日発行

田ンボの四季

大木　智恵子

私が当地（深大寺南町1丁目）に引っ越してきて8年目になります。最近は周辺の環境の良さに気が付く余裕も出てきました。この地域は調布でも貴重となった水田が近くにあります。

春―全部で約5反ぐらいでしょうか。水田としては決して広くない面積も、持ち主は何軒にも分かれています。連休の前くらいから、土日に各家が自分の持ち田をおこし始めます。それまでに棄てられ、たまった缶等ゴミもなくなり、土は息を吹きかえす様です。

水を入れてあぜを塗り固め、そして一面を泥にして田をつくっていきます。くつ下ひとつをはいて、ズボンも泥だらけにして。しかし、毎年耕す人は同じ顔のおじさんとおばさんの様です。道ゆく人もほとんど、田ンボの作業に目をむけようとしません。耕す人も見られる快さを期待していないようです。これまた、休みの日、田植えが終ります。

夏―見まわる小型トラックのおじさんを除いて、田ンボから耕す人の人影はなくなります。

子ども達がトンボを追って、道路から網を伸ばします。小さな子があぜを走ります。あっ、近所のおばさんにしかられました。「農家のおじさんが大切にしてるんだよ。そこへ入るんじゃない！」

でも去年はここでギンヤンマがとれました。

秋―一家総出で稲刈りです。刈った稲は干します。耕す人の子供や孫まで出てきて、春のさびしさがウソのようです。夫婦で協力して手際よく脱こく、袋詰めしてゆきます。プロの農家です。

去秋、収穫の終った田の際に、もみ付きのワラが2、3束おいてありました。何かの風習なのかな。

冬―田ンボは、もとの空地に戻ります。所々缶やビニールが捨てられ、子らが走り、雪がつもった日には雪合戦に恰好の場所となります。そして春の到来を待ちます。

以上、日々の生活の中で目にする水田の風景をとりとめもないまま記しました。意識しないでいると見過ごしてしまう大切なものに少しでも気付いてゆきたく思うこの頃です。

WHAT'S 消費者まつり

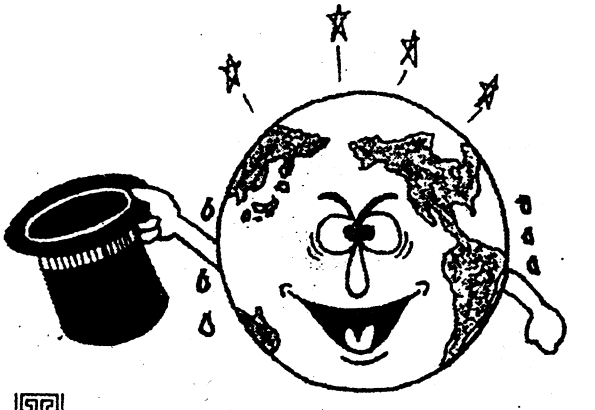
調布市消費者まつり実行委員会
事務局　　寺崎慈子

2月27日の夕方、調布駅南口に、モクモクと白い煙が立ち込めた。
人は元来、火や煙に引かれる本能があるようで、次々に煙の正体を知ろうとして覗きにくる。
ある人は「なーんだ！ポンポン菓子だ」と言い、ある人は「焼き芋だった」と納得して行き過ぎる。
皆、何故か心和むような笑みをたたえている。
どうも火や煙は、人を心和ませる作用があるようだ。
「なんですか？」と人が聞きに来るたび、機会を提供してくれたKK東洋ガラスの人は説明におおわらわだ。

さて、この煙を出す物の正体は、今年から始まった「調布市消費者まつり」の中で行われた一光景、簡易炭焼き器で使い終わった割り箸を焼いているところだったのだ。

この他「車椅子探検隊」や小学5年生の「浄水器づくり」や中国留学生による演奏や、はたまた、原宿のストリート・パフォーマーがバック転を切ったり（「調布って、面白い事やるわね」とカップルの囁きあり）粗大品の抽選会があったり、混沌としていて、支離滅裂のようでいて、スムースに流れるように進行したこの「消費者まつり」。
国際交流、環境問題、福祉問題など、まさに現代の多様な問題、ニーズを表現していたように思うのだ。

そして、その多様な主張をしている人達が皆、横並びで一堂に会したことが、素晴らしかった。今をれぞれが孤立して運動するのでなく、横に手を結びあうことが求められているのではないだろうか？



ー世界の違う人達がそこで出会い、仲良くなり手を結んで力を貸し合うーそんな場に「消費者まつり」がなることを、そして若い力をどんどん吸収していき、益々混沌と、支離滅裂に人々を巻き込んでいけるようようなパワーを内蔵する、そんなものであり続けることを、自称「仕掛け人」として、思っている。

はじめてのすみやき

～消費者まつりで～

小学校３年　大木かなえ

私は、はじめて、すみをやきました。（きてよかったな。）と思いました。わたしは、うちわであおいだり、木をくべたりしました。こおゆうことのすきなわたしは、とってもたのしくてたまらなかったです。木をくべるときは、ちょっとあつかったな。でも、たのしいって気持ちが、あつければあついほど、こみ上げてきます。うちわをあおぐ時は、ばたばたあおいで、とてもつかれました。

と中でやきいもをやきました。わたしは、やきいもがだいすきなので、（やったー）と思いました。でも、６時半ごろになってもやけないのでがっかりしました。

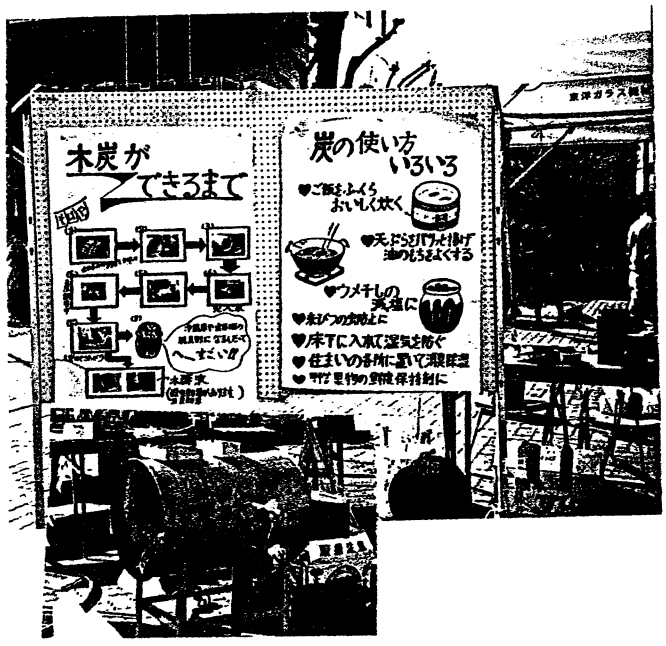
次の日、ごはんをたべてから、すこし食休みをして、よういをしてから、いちもくさんにいきました。わたしは、と中でどんなことをやるのかなって、たのしみでした。いってみると、まだあんまりきていませんでした。おじさんに、「はやいね。」と、言われました。

そして、だんだん手伝いの人たちがあつまってきました。そしてすみをとりだしてみました。わりばしだけど、きっしりつまってい

ました。

それを、全部出して、それを、ぼきぼきおりました。中には、まだやけてないのもありました。わたしは、（あんなにやいて、まだやけないなんて、へんだな。）って思いました。それが、おわったら、ビンの上にきれをあててゴムでむすびました。さいしょはむずかしかったけどだんだんなれました。全部おわると、みんなにくばりました。

（みんなどうもありがとう）



春：野川へのあいさつ

府中市　大西友幸（大学１年）

用水路のそうじの日から一週間経って原稿の依頼が来ました。大友「どうせなら当日に頼んで欲しいな。現地の活動と会報編集との連係がうまくいくのに。」西幸「数か月ぶりに何の前ぶれもなく参加する奴（＝僕）もいる。事前に決められたことには限度があるのさ」さっそく大友君と西幸君との論争が始まりました。

論争１：ごみは捨てられるままに……

大友「用水路で包丁見つけたけど危ないなあ。去年はこんなことあったの？そういう記録は無いの？」

西幸「ごみの記録なんて無いよ。」

大友「でも活動の実績を何らかの形で文書化するのは大切だよ。参加実行の内容が各個人に帰属して、"会"の姿がみえないのは、毎年行う活動としては残念なことだね。」

西幸「だけどごみをいちいち記録するのは負担が重い。今年だって人数が少なく下流のそうじまで手が回らなかったじゃないか。それに、ごみの記録より参加者の意見・感想を文書化することの方がいいのでは。」

大友「それもいいかも知れない。いずれにしても、僕は参加者全員の足跡が残らないことが不安なんだ。」

論争２：生き物から察た野川

西幸「例年の生き物調査は、野川の春の定期診察と言ったところだね。」

大友「でも今年の診察ではパックテストで水質の記録はとらなかったのでは。」

西幸「僕らしろうとには数字は無用。それに生き物調査で十分じゃないか。僕なんかはじめてカワニナみちゃった。結構大きいね。もっと小さいのかと思ってた。あれで水はきれいだってわかるじゃん。」

大友「まあね。でも数字を統計化できない君の無能は否定できない。じゃあ生き物の記録はとったのかい。」

西幸「してない。記録をとるだけが自然観察じゃないよ。それに、自然は記号化できない多様性をもっているんだ。昆虫博士の異名をとる上村君だってわからない虫を僕はみつけたよ。」

こうして２人の論争は空中に飛散してしまいました。野川で遊ぶまちづくりの会に収拾を期待したいのですが、それを成し得ない会のシステム上の欠陥を僕は知っています。春の日の外遊びをそれなりにエンジョイすることは可能です。でもその日、僕達は別の課題の克服に失敗したのではないでしょうか。来年はその課題が解決され、たくさんの人が参加してくれることを希望します。

水路の掃除アンド生物観察

小学校６年　尾辻　祐樹

この水路の清掃は、これで第三回になります。ぼくは、三回ともでました。ぼくは、六年でやっとわかりました。二回目のときは、五年生でした。そのときは、なんで、ゴミを捨てるのかな、なんて、考えていませんでした。けれど、二回目が終わってから、環境のことを勉強をしました。それで、三回目のときわかりました。ぼくは、六年生になって、（どうして、こんなに川を汚すのかな）と、思いました。けれど、川にはまだたくさんの生物がいました。たとえばザリガニややごなどがいました。ぼくは、お父さんが環境のことが好きで、ぼくもやっているうちに、だんだんすきになってきて、今は、もう好きになりました。たま川で魚とりをすることもあります。これからも、また、水路の掃除をやると思います。そのときは、ゴミがへっているといいです。ゴミを捨てる人がいなければもっといいです。第四回目もやると思います。そのときは、友達をいっぱいさそって、水路をきれいにしていきたいです。

用水路で観察できた生物（４月２５日）

- オニヤンマのヤゴ
- ハグロトンボのヤゴ
- カワゲラの一種の幼虫
- ヘビトンボの幼虫
- カゲロウの一種の幼虫
- ミズムシ
- ホトケドジョウ
- アメリカザリガニ
- ヌカエビ
- タモロコ

トンボと環境（VI）

～林とトンボ～

（上村　佳孝）(第2)

林のそばの水田でトンボを探しながら、一日中ブラブラしていると、撮影を後回しにしたトンボがいつの間にかいなくなっていたり、逆に、さっきまではいなかったトンボが急に現れて、慌ててしまうことがしばしばあります。

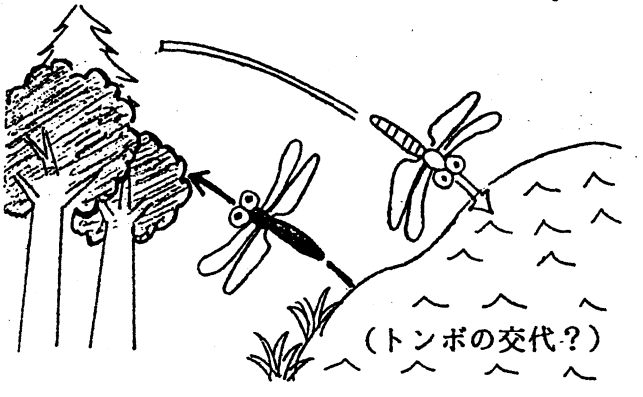
多くのトンボは休息、睡眠、食事のために林を利用しています。そこで、このような『トンボの交代』が起こるわけです。

また、羽化したてのトンボは、成熟するまでの期間を林の上で過ごすことが知られていますし、風雨が強いときには、林は避難所として利用されます。

このように、トンボにとって一見無関係にみえる林も、大きな役割を果たしています。ただし、林の中ではトンボの姿は目立たなくなってしまいますが……。

さらに、カトリヤンマ、オニヤンマ、コシアキトンボ、オオアオイトトンボ、リスアカネなど、暗い場所を好み、林がなくては生活できないトンボたちもいます。これらのトンボのうち、カトリヤンマ以外は、暗い杉林よりも、木洩れ日の差し込む雑木林で多く見ることができます。

多くの種類と数、そして、盛んなトンボの交代。と、一日中居ても飽きないような、トンボにも僕にも居心地の良い場所は、やはり雑木林に隣接した池や水田や小川のようです。



（トンボの交代？）

調布周辺で確認したトンボ（上村）

1，アジアイトトンボ	7，オナガサナエ	13，ギンヤンマ	19，ショウジョウトンボ	25，ノシメトンボ
2，クロイトトンボ	8，ウチワヤンマ	14，オオヤマトンボ	20，ミヤマアカネ	26，コノシメトンボ
3，オオイトトンボ	9，オニヤンマ	15，シオヤトンボ	21，ナツアカネ	27，コシアキトンボ
4，オオアオイトトンボ	10，カトリヤンマ	16，シオカラトンボ	22，アキアカネ	28，ウスバキトンボ
5，ホソミオツネントンボ	11，マルタンヤンマ	17，オオシオカラトンボ	23，マユタテアカネ	29，ハネビロトンボ
6，ハグロトンボ	12，クロスジギンヤンマ	18，コフキトンボ	24，リスアカネ	

あなたの庭を蝶の楽園に

本木　伸太郎

餌の少ない冬はパンくずや果物で野鳥を集めることができますね。

冬の風物詩のようになりましたが、春から秋にかけては様々な蝶を呼ぶことができます。

花と蝶はセットになっている感じがしますが、幼虫の餌になる草木があると、何時でも何か蝶を見ることができます。試して見て下さい。

庭の隅か生け垣の薄くなったところに、サンショを植えるかミカン類の種を播いてみて下さい。大きなアゲハ、黒くて表面が青く輝くカラスアゲハなどがすぐやってきます。

家庭菜園（プランターも可）にセリ、ミツバ、パセリ、にんじんの種を播いて下さい。黄アゲハが来ます。ごぼうがあれば、ヒメアカタテハが。

藤（フジ）、萩（ハギ）、葛（クズ）、ネムノ木がありますか？小さなよう虫が花芽を食べます。黄蝶、ウラギンシジミ、ルリシジミ、コミスジなど宝石のような蝶たちを同居人にすることができます。やまいものつるなどが垣根などにからみついていませんか？白黒のメリハリのきいたダイミョウセセリがいるはずです。

ダイコン草が増えてきましたが、５月にオレンジ色の紋のついたモン白蝶のようなツマキ蝶が３０年ぶりに帰ってきています。

ホトトギスがあれば青白い帯が２本まっ黒な羽に走るルリタテハが冬、生きのびて、早春ジンチョウゲなどの花で蜜を吸う姿をみることができます。

ササや竹には地味ですが、渋みのある美しいジャノメ蝶が住みつきます。

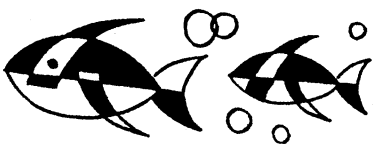
ちなみに東京近辺には４～５０種程の蝶がいます。仲良くできると新しい世界が見えてくる事請合いです。幼虫をむやみに殺さないだけでもよいのです。

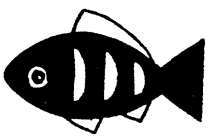
また、せりは他の草との見分けが少々難しく、よく似たような草を摘んでしまったこともありましたが、お陰で現在でもせりを見分ける目には自信があります。

遊びに関しては、水にまつわる思い出がいくつかあります。現在のかに山下にある、ほたる園コーポ前の用水路（今はコンクリートの蓋がしてありますが）は、当時小さな川の様で、水着を着て遊びました。また、その隣ではご近所のおばあさん方が野菜を洗っていたり、きっと水もきれいだったのでしょう。そして、これは場所に自信がないのですが、確か、現在の自然広場奥の野草園の中あたりだと思うのですが、滝があったんですね。そして、その下の水辺には、かにや小魚がおり、魚取りの網など持ち合わせがない時には、友達とタオルの端と端を持って魚をすくってみたり、またスイカを冷やして食べたりと色々思い出されます。

今私の子供達も毎日の様にかに山で探検ごっこを楽しんでいます。近々このかに山も整備される予定があると聞きましたが、確かに整備されれば、見た目には美しい公園にはなるでしょう。地面には芝生が敷かれ、そして小さな植木等が植えられ、その回りにはきっと囲いができ、シャレたベンチが置かれた様子が想像できます。しかし、地べたに腰を下ろし、土の温もりを感じ、また植木や野草の草花等は囲わなくても、小さな子供には、親が大切にする気持ちを教え育ててやる方が「草花を大切に、入ってはいけません」の表示よりずっと人間的ではないでしょうか。野山を駆け回り全身泥まみれになった子供の姿に一瞬たじろぎますが、洗濯しながら、つくづく健康な子供を授かった幸福とまたこの自然の豊かな土地で育てることのできる喜びを味わっております。

環境が人間を育てると時折耳にしますが、もちろん家庭環境も大事でしょう。そして、今では、東京には珍しく自然の状態で残されているこのかに山周辺で緑の匂いを胸一杯吸って育つ子供は本当に恵まれていると思います。いつまでも子供達が探検ごっこを楽しめる様な、あまり人の手が入らない状態でこのかに山が保護されます事を、心より願っております。





かに山の今と昔

小山基子

「野川で遊ぶまちづくりの会」の友人より、「小山さん、昔のかに山周辺のこと会報に書いて下さい」とのお話しがあった時、さて困ったなと思いました。確かに私はこの土地で生活して３０年になりますので、その間の町の移り変わりを目にしてきてはいるのですが、全てうら覚えで、こんな感じじゃなかったかなという程度で、ここはこうこうこうでした、と言えるほどはっきりした確信がないのです。間違っていたらごめんなさい。

私が現在の家（深大寺南町一丁目）へ越して来たのは昭和３８年で８才の時でした。当時はもちろん住宅も少なく、大きな農家がぽつりぽつりあったくらいで、きっと私の家は、この辺では建売住宅第一号ではなかったかと思います。回りは、田畑はもちろんありましたが、ほとんどが空き地という感じでした。そして、その空き地には、今ではまったく見かけなくなったピンクのレンゲ草が、季節になると一面咲き乱れ、首飾りなど作った楽しい思い出があります。また、現在の水生公園の所では、春になると、毎週日曜日の朝の恒例である、せり、のびる摘み、のびるは、今も時折見かけますが、とても細くて気の毒で、とても摘む気になれませんが、当時のものは、それはとってもりっぱでした。また、せりも店頭に置いてある丈の長いスマートなものではなく、茎がしっかりしていて力強い野生のせりという感じでした。

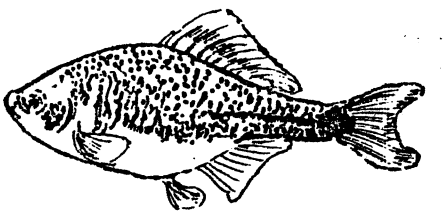
タナゴ（前編）

昭和40年代初めまでの、武蔵野の水田や小川を知っている世代にとって、コイやフナよりも身近な存在だったとも言えます。キンブナ、ギンブナよりも小型で、薄っぺらな魚ですが、若魚は群をなしているので名人級は百匹単位で取りまくっていました。

オスの尻ヒレにわずかに色がつく程度ですから、小魚などに興味のない人では区別はつきません。しかし、今の季節のオスの色あでやかなことといったら、原色を派手に際立たせる熱帯魚と対極をなします。

野川では昭和30年代前半まで子あゆの遡上も見られましたが、川の特性からタナゴたちの天下でした。今考えると、水田のそばはバラタナゴ（バラ色になるからです。天皇陛下が保護を訴えている日本純潔種ではなく、金魚屋で見かけるポピュラーなやつです。）が圧倒的に多く、野川の本流には数は少ないけれどチョビヒゲのあるヤリタナゴがみられたし、わき水の小川や500m間隔ぐらいでミヤコタナゴ（なんと国の天然記念物になってしまった）がひしめいていたのです。

多摩川や野川の水質が良くなってきて、復活した魚も多くなったのですが、タナゴだけは絶滅状態です。それは、タナゴがほかの魚と違う特別な繁殖の方法をとっているからなのです。（N）



露と水滴（その二）

今、目の前に大型の水槽がある。一般の家庭用の五倍の容量がある。中にはセキショウモと呼ばれている紙テープのような葉をなびかしている。水槽内のわずかな水流に逆らい、清流特有の魚が元気よく泳いでいる。

魚が元気な時というのは、水がピカピカと光っているような気がする。そして、水を指につけてすりあわせるとサラサラとしている。自然の川で、こんな流れを見ると思わず中に入りたくなってしまうだろう。

ところがCODを測定すると、野川の水質測定値と余り変わらないのである。

水の中には我々の目には見えないバクテリアが無数に活動している。水を生かすも殺すも、このバクテリアをいかに活動させてやるかに最初のポイントがあるのである。

※雨不足から、伏流水（地下の川）のない三ヶ所が涸れています。小さい魚は石の下にいます。今こそ、みんなで救出作戦をやりましょう！

頑張れ都市農業（５）

～れんげ畑にて～

依田　輝男

５月５日の子供の日、私は小金井の仲間たち６人で日野のたんぼへ行ってきました。百草園の駅からほど近いたんぼはれんげの花盛りでした。幼い少女が二人、花を摘んで首飾りを作っていました。心持ちよい日差し、５月の風、恐らく日本の少女は何百年いや千年以上も前からこうして豊かな時間を過ごしていたのでしょう。隣のたんぼでは都市市民のグループ「やぼ耕作団」の人達とこのたんぼを貸している農家の中村さんが種もみを蒔くための準備作業に余念がありません。

二枚の木の板で土を小さく砕いてならしてゆきます。畦道では名も知らぬ無数の草花が咲き乱れていました。一見すると楽園のような光景に見えますが、実はこれも今年一年の運命なのだそうです。ここらあたりは開発予定地になっていて来年から住宅建設工事が始まります。さすらいの「やぼ耕作団」は又新たな拠点を求めてさまようのでしょう。これが世界一豊かだといわれている日本、「うるおいとゆとりを」といわれている日本のゆとりのない現実です。空間やすきまを場所的に、精神的にはふれあいを、時間的には無為のときを切り捨てて経済成長を遂げてきた日本。その背後に切り捨てられたものの無限の豊かさを歯ぎしりするような無念さで思い起こさざるをえません。僕たちの少年時代のあのわくわくするような空き地の原っぱの秘密の隠れ家やめだかやふなをとった水たまり。悪がきや近所の大人達との交流の場でもあった時間や空間、経済効率からみれば計測することのできない貴重なものども。そして環境問題が２１世紀の最大の問題だといわれ、自然保護、環境教育が叫ばれている今、尚ますます切り捨てられようとしている最大のものが「農」なのです。農的環境は雑木林や湧き水、原っぱやたんぼなどからなり、ホタルやトンボやチョウ等が豊かに生息する場所でした。そのような場所が今まさに次々と切り捨てられようとしています。私たちも「やぼ耕作団」や多くの「農」を大切に思う人達とともに市民も農を守る援軍の列にささやかながら加わりたいと思います。

「遊ぶ会」活動メモ（1992年2月～1993年5月）

2月25日　第1回消費者まつり記念フォーラム『環境・リサイクル・農を考える』

「環境問題としての農」を語るに最適の農大進士先生を迎えての講演は調布の街づくりを考える上でも大きな示唆を与えて下さるものでした。

2月27～28日　第1回消費者まつり

前夜来の雨がオープンセレモニーに合わせるかのように晴れ上がり、まつりというにふさわしい楽しいパフォーマンスの数々の中に、環境と福祉の時代といわれる21世紀の調布のあり方に問題提起を含んだ特別イベント「炭焼き」「車椅子探検隊」「小中学生徒による研究発表や浄水器作り等、変化に富んだ内容で、私達の興味をかきたててくれました。わが会では、湧き水の生き物たちの展示を行いました。

3月18日　消費者まつり反省会

30数人もの参加者があり、好意的な批判と「多くの人達と知り合えてよかった、来年もまた一緒にやりたい」という意見が多く、嬉しい限りでした。

4月25日　第3回用水路の清掃と湧き水の生き物調査（佐須）

お忙しい中を魚の学者、君塚先生も参加して下さり、親子でジャブジャブ楽しみながら、湧き水の環境やゴミ問題（タイヤが5本も捨てられていた）についても考えた一日でした。

5月9日　「市民たんぼ」がスタート

大木健次氏を責任者とする「たんぼ班」が念願だった市民による稲つくりに挑戦することになりました。地主さんのご好意により、助っ人として「種まき」（5月9日）「あぜ作り」「しろかき」「田植え」「収穫」まで一通り、農家のご指導で行います。市民も農家の人達とともに「農の再生」に微力ながら力になってゆきたいと願っています。（文責　依田）

■編集後記

用水路の清掃に参加して感じたことは、一年の間に「何でこんなにゴミが増えるのか」という驚きでした。小さい用水路にタイヤやスキー板まで捨てられてました。

清掃後、きれいになった用水路を見たら、捨てた人に対しての腹立たしい思いは吹き飛んで爽快な気分になりました。ぜひ来年も参加したいと思います。

昨年用水路の清掃に参加したのが野川の会に入るきっかけでした。なぜか今号から会報の編集作業を担当することになりました。紙面に余裕がありますので、どしどし寄稿をお願いします。（四方田）